

- 槽側壁の水面上へのはい上がりは水表面との境界面にウェット・スーツ地をはり付けることおよび水面上へはい上がって乾いて死亡することは、穴を開けた塩ビ管を水槽側壁の水面上約20 cmのところ配管して、その穴から給水を行ない側壁を絶えず湿らせておくことによりかなり防止できた。
- 4) ふ出した浮游幼生は2、3日で匍匐生活へ移行した。匍匐生活へ移行直後の稚貝殻長は0.80～0.95 mmの範囲であり、平均殻長は0.875 mmであった。その後の殻長は10日目が1.40 mm前後、20日目が2.00 mm前後、30日目が3.00 mm前後であった。
 - 5) 10トンの角型コンクリート槽2面を使用して、浮游生活から匍匐生活へ移行した稚貝を30日間飼育して、平均殻長3.00 mmの稚貝を255,308個体生産した。種苗の単位生産量は7,208個体/ m^2 と21,478個体/ m^2 であり、歩留りは5.73%と10.74%であった。
 - 6) 生産した稚貝の殻長範囲は13～6.5 mmであり、その殻長組成は殻長2.00 mm以下が20%、2.01～3.00 mmが41%、3.01～4.00 mmが27%、4.01 mm以上が12%であった。死貝の殻長範囲は0.9～3.2 mmであり、その多くは浮游生活から匍匐生活へ移行直後から殻長2.00 mmまでに多くみられ、殻長2.00 mmまでの死貝は80%を占めた。

※ 本研究の詳細は、水産増殖 24(4), 109～115に記載。

キスの種苗生産に関する研究— I —*

室内水槽における自然産卵について

平 本 義 春

キスを用いて種苗生産の基礎である親魚養成の可否を検討し、さらに進んで種苗生産技術の方式を確立することを目的として1974年10月17日から1975年8月22日まで地元(鳥取県大谷)で採捕したキスを室内水槽で飼育し、水槽内での自然産卵、産卵数およびふ化率等について若干の知見を得た。

- 1) 地曳網で採捕したキスをマアジ、ホウボウ、インダイ等と混養して飼育することにより漁獲後10日前後で餌付けすることができた。餌料としては、マアジ、カタクチイワシ、ホウボウ、ハタハタ、シイラ、ヒラメ、ヒレグロ、アカガレイ、エビ類およびアサリを使用した。
- 2) 産卵盛期以外で水温が80～290℃の範囲内では外的刺激等がなければ日間摂餌量は水温が高い程多くなった。また水温が80℃以下では摂餌を全く行なわなかった。親魚の体重に対する日間摂餌率は、2月下旬(水温90～109℃)で153%、4月上旬(水温130～139℃)で458%、8月下旬(水温275～280℃)は650%であった。
- 3) 産卵期は6月中旬(水温216℃)～9月上旬であり、その盛期は6月下旬～7月中旬であって、

この30日間に総産卵数の $\frac{2}{3}$ 以上の卵が産出された。

- 4) 雌親魚8尾(全長18.1~21.8 cm; 雄7尾)による総産卵数は1,582,450粒であった。またこの8尾の1日の最多産卵数は80,000粒であった。
- 5) 産卵数の日変化から推すとキスは明らかに多回産卵魚であって、産卵は1日1回、2時間以内で終る。産卵時刻は日没前後であるが、産卵期が進むにつれてその時刻は若干遅れる傾向が認められた。
- 6) ふ化率は22.5~90.9%の範囲にあり、産卵期の前半において比較的高い値を示した。またふ化率は1日の産卵数が多い時に高い傾向を示した。
- 7) キスの親魚養成は室内の水槽で可能であり、自然産卵によって採卵した卵はふ化率も高く種苗生産に充分使用できると考えられた。

※ 本研究の詳細は、水産増殖 24(1), 14~20 (1976)に記載。